

### 自主的な体育学習を成功させる教師の支援とは

器械運動領域のマット運動は学習指導要領によると「技を身に付けたり、新しい技に挑戦したりするとき楽しさや喜びを味わうことのできる運動である。また、より困難な条件の下でできるようになったり、より雄大で美しい動きができるようになったりする楽しさがある。」とされている。児童は技を習得するために、試行錯誤しながら練習し、技のこつを思考・習得しながら活動を進めていく。技の習得を中心とする活動の場合、伝統的には教師主導の学習が進められているが、近年の児童の自主性を尊重する学習観の中でどのように技やこつを定着させるのだろうか。これまで筆者が小学校および中学校でのマット運動の授業を参観させていただいた際に常に疑問を持っていた点であった。つまり、自主性を重んじると学習者の動機づけや意欲は高まるが、技能は定着しにくくなる。「より雄大で美しい動き」を目指すことが特徴である器械運動領域において、この辺りはどうバランスをとるのか、それが課題であると考えていた。

今回の佐藤秀恒教諭の実践では、マット運動で3人組のトリオ学習で子どもが自主的に練習し、技のつなぎ方や動きのこつについて共有する授業であった。子ども達は自主的に活動を進め、学習カードに記入しながら自分なりのこつを考えていた。タブレットも上手く活用し、短時間でお互いを撮影し、それを見ながら具体的な動きの状態や連結の状況を確認、それが動きのこつを考える大きな材料となっていた。また、考えたこつを全体で共有する場面を設け、また、見本をみせた児童がより上手くなるためのこつを他の児童に発言させ引き出す工夫をし、学び合い助け合いを行いながらこつを共有できていた。自主的な学習が活きる指導ができていたと感じた場面であった。

本実践の事前の実践を参観させていただいて、課題と感じた点があった。それは、各グループを巡回した際に適切な支援（特に技能に関する支援）が出来ているかどうか、であった。私が見た場面は、児童が何度も壁に向かって壁倒立をしようとしているのだが、足が届かず戻ってきてしまう場面であった。これはひとつの例であるが、児童や児童同士が精いっぱい努力し技の練習を繰り返していても、どうしても超えられない箇所があり、それに対し教師が見過ごさずに関わっているかどうか、この点であった。事前の実践では巡回しトリオ学習の行い方については声掛け出来ていたが、技能の指導については特に重視していないようにみえた。新型コロナの影響がまだまだ残る中で、庶務に追われ忙しいこともあるかもしれないが、トリオ学習中の子どもへの関わり方が表面的であるように思えた。授業改善の助言について、この事も含めてお伝えした。

本実践の公開日にあたる公開研究協議会の当日、実践をみせていただいて、すぐに変化を感じることができた。まず、児童の積極的な練習の参加である。また、技能が事前授業に較べて非常に高められており、児童が自信を持って活動を行っていた。トリオ学習中の教師の関わり方も技能についても積極的に助言を行い、場合によっては補助をしたりしながら熱心に行っていた。

自主的な体育学習は児童にすべてをゆだねる活動ではない。教師の支援や指導が不可欠なものである。それは児童が自主的に行った活動の中でよいものを教師が価値づける行動であり、また、技能的な指導を軽視することなく巡回しながらグループや個々に積極的に行うことである。本実践を通じて、自主的な体育学習における教師の支援の重要性を真に感じる事ができた。